『可笑記』と『清水物語』

――その接触をめぐって――

三浦邦夫

On the influence of "Kiyomizu-monogatari" on "Kashōki".

Kunio MIURA

（昭和四十六年十月十八日受理）

『可笑記』と『清水物語』とは十一か所―『可笑記』の側からいえば十一の段にわたって同類の文辞を共有する。この小論の目的はこれら共有の文辞を手がかりにこの二作品の接触を解明することにある。まず二作品が共有する文辞を指摘するならば次のごとくである。

(1)可二ノ十七　むかしさる人の云るは、それ天下にたからおゝくありといえども、人をもって第一とす、人の中にも士農工商の四民を以てたからとす、士とは奉公人の事、農とは百姓の事、工とは職人の事、商とはあきんどの事、此外の者は遊民とて何の用にもたたず、ただ鼠のごとし、医者智者芸能者はいづれに付てもかくべつの事さたに不ゝ及、但芸能に取ては弓てっぽう馬さん用へいほうしつけかた此外用にたたず、されども天主のえらびすて給はぬは、ちいさきうをを煮るがごとし、

清水(上)　答曰。士農工商の四民は。国の宝なくてかなはぬものなり。そのほかに用にもたゝぬものをゆうみんと申候。（P22）

(2)可五ノ十九　むかしさる人の云るは、諸侍の善悪を見しらん事は何よりもって大切なる事ならん、去ながら先親に孝行なるをみきいては、其人かならず主君に忠節あらんと思ふべきか、又ゆへある人のおちぶれすりきりたるをあはれみ情ふかく、人の恩をかんじわすれぬをみきいては、其人かならず主君のおちめを見すてず、いづくまでも付したがいて、いかなるかんなん辛苦をもみとゞくべきと思うべきか、又ともだちの中よくいつはりなく、人をほめたてそしらぬを見きいては、其人かならず主君につかへて陰陽あらじと思ふべきか、もしかようの人あらばいそぎ知行金銀をとらせ、情をもかけてめしつかはるべき歟、又老出頭衆も御とりなしを申、念比にいたはり給ふべきにや、たとへば目の前にての立ふるまひ利発めき物毎利口才賞だてを仕るとも能々そこの心をみさがし候はゞ、十人の七八人はみなけいはくへうりのやつばらなるべし、かようの人はかならず利慾にふけりて、人の恩情をもかんじしらず、うときしたしきをもわきまへしらず、義理じひをもおもんじしらず、さあれば主親、兄弟、親類、ちいん僧法師の物をもかすめ取、おしたをさん事何のうたがひあらんや、され共せけんかようの人々こそ、主君もたのもしきものとおぼしめし、過分の御加増金銀をもはいりやうし、御情にもあづかる、又老、出頭衆もよきさぶらひと思ひ、めた物取なしをいひ念比し給ふなれ、さあればをのがどうよく不道の心底を、随分よき事と思ひじまんをしていよ〳〵悪逆不道におごり、衣類しやうぞくはなやかにときめくを、目余の人々も百人の内八九十人までは、みなけなりがりうら山しがりて、此心体をにせまなび候間、日を追て世上諸侍のかたぎいやしく成もてゆく、いたましき事かなしき事、

清水(上)　順礼曰。諸国の侍のかたぎいやしく成たるは。何よりおこりたる事にて候や、答曰。その主君のめしつかひやうのわたくしなるよりおこり候。君たる人めのまへのたちまはりだによけれは。かたかけにては牛馬のくひをきり。おや子知音の物をぬすみ。人のをんをもしらず。あはれもしらぬともがらもよき奉公人とゆるし。あまつさへぶんにすぎたるろくをもたび候ゆへに。日々にいやしき心になり。ぎりをしらずふだうなるこそあさましけれ。人の心のよからん事をねかはゞ。つね〳〵さほうよきものを上てもちゆべし。親にかう〳〵なる人は君にちうあり、人のしたしみと。をんをわすれぬものは主君のをちめをみすてす。友どちにいつはりのなき者は奉公にかげひなたなし。かようのわりふりをあはせて。人のよしあしをさためられたら

んは。日々にかたぎよく成べし。君のまへときめく人のためはかりにさかしくみえて心にはぎりもをんもしらぬあぶれ者を。よしとゆるし給はゞ。かんようのときのあしもといかゝ候はんや。大坂へんのありさまにもあさましかりし事なんおほかりし（P23～P24）

(3)可五ノ二十　むかしそれがしためしのよろひおどし候はんとて…又傳説といふ大賢人は、日用をとり堤をつく人足の中よりたづね出されて、天下をおさむる家老家臣となれり、しからばよき人はいか成所にもこれある物とおもふべきなり、

清水(上)　傳説といへる人は。ついちつく日用の中よりえらひいたされて。天下をたすくる大臣となれり。…けんじやのあらんところは。山にも市にも。又足もとにもありぬへし。えらぶ人そまれなる。（P21）

(4)可五ノ二十一　むかしさる人の云るは、人はたゞ友だちこそかんようなれ…朝夕かたをならべ、ひざをくみ詞をかはすは、当座同輩のまじはりにて、友だちとはいひがたし、其しさいは我よりうはめなる人は、我をいやしみあなづり、内のもの同前におもひこそすれ、よきほどにもてなし、こんせつにして悪をすくひ、善をすすめんとする人はなし、さあればいかほどしたしぶりなりとても、ともだちとは云がたし、又我より下めなる人は、ともかく我気にあはんとおひげのちりを取、萬ほめはやしてこそかゝれ、悪をいひしらせ、善にいたらせんとする人はなし、さあらばいかほど心やすき中成とても、友だちとは云がたし、いはんや大名、高家、福者におゐては、かたかげにては諸人其悪をあざけりそしりわらへども、さしむかってはいひなをす人夢にもみず、さあれば大名、高家、ふくとくの人は、みな萬事わがするほどの事、我思ふ程の事にましたる事はなしとのみおぼして、皆我まゝなる事のみ取をこなひ、善事は露ちりもなく、悪事は山よりたかく、海よりふかし、若又その悪をいたみうれへて、いひたゞしいけんをする人あれば、いやがりむづかしがりて、いんぎんにまぎらし、遠のけをきてそしりにくみ給ふ間、かの人も又せんなき所無用と思ひ、出入をとめて遠ざかる、さあれば是をみきく人々、身のためをかんがへ、いよ〳〵ほめあがめてはもてはやせども、其悪をいひなほさんとする人一人もなく、心は日々におごり、悪逆不道重過して、いつぞのほどにか身命破滅し、おちぶれ給ふ時をみるに、事とふ人ひとりもなく、ひごろしたしき友だちのなかりし、心中のつたなきほどみえて、いとあはれにあさまし、ちかきとし月に大名、高家、福者の身上おとろへたる其かずおほし、よく〳〵かんがへ知べし、

清水(上)　又友といふは五りんのひとつにて。なくてかなはぬ物なれとももちたる人なし。下〳〵にはありもやすらん。国のかみよりうへには見きかす。友といふは心をのこさずうちかたり。たかきいやしきをわすれ。たがひにあしきことをなをし。心のふかからんこそ友ならめ。はうばいのつきあひは。そのふんさいのれい有てともにあらす。又まへにかしこまりゐるものは。ともかくもまに合おひげのちりをこそとれ。心やすしとても友とはいひかたし。友なきゆへに大身なる人は。何事も我程かしこくてよきものはなしとおもはれけるこそつたなけれ。かたかげにてはわらへとも。まへにてはいふ人なし。もしまれにもさやうの事いふ人あれば。むつかしとてちかつけす。其人も用ぬ事をいひてもせんなしと思ひ。又はおひげのちりもいやなりとてとをのくほかの事ぞなき。其とをのくを見る人。いよ〳〵身のためをかんがへてほめてかゝるゆへに。日々に心おごりてともゝなし。それによりて大身なる人の。おちぶれたるをみるに事とふ人もなく。心のあさき程みえていとあはれにあさまし。（P24～P25）

(5)可五ノ二十二　むかしさる人の云るは、つく〳〵と世間をうかゞひ友なはんとするに、其人をいまだ求ず、武直なる人よとみれば、萬ふつゝかにして田夫野人の月花をみるがごとし、又物知がほにして詞にほらしき人かとみれば、名利にのみふけりて実ならず、又心詞あらましすくやかに物やさしけれども、あまりにひいきづよく、還て其友をあやまつも有、是ぞまことに下らうのことばに、かうばりつよくして家おしたをすといへり。

清水(上)　又下下の中に。人の友ともなるへき人やあるとみるに。其身正直なるはあれとも。ふつゝかにいやしくて。田夫の花にたはれたるかごとくならんもつきなし。又すかた言葉やむ事なきも。心まめならぬはあやうし。心も大かたあしからぬも。ひいきつよくあらんは、人のうらみあるへし。一色にすきこのむ心あらば。主君のついゐに成ぬへし。（P25）

(6)可五ノ五十　むかしさる人の云るは、侍として金銀をほしく思ふは、小身ものゝ上なり…いはんや一国一郡の御主として、何に事をかきめいわくにて、あまりに金銀をむさぼりたくはへ給ぞや、大名衆の御すりきりは、きゝおよびてもたのもしくいさぎよし、其仔細は、御家中の諸侍に、さだめてをんしやう情をかけ給ひて、よき御内の人々おほくもち給ふゆへなるべしと、おくふかく思ひ奉る。其上いかほどの御摺切にても、金銀のかしぬしあり、

又いかほど御借金なされても、さいそくをはせめこい申ものもなし、しからば何の御くらう御めいわくやある、すでに陸奥の守正宗公御一代すりきりにておはしませしためしあるをや、さればお大名衆の御すりきりにて御家めつぼうといふ事をばきかず、どうよくふかくおはしまして、仁義にそむき給ひてこそ、みな御身上はめつし給ふ、其数古今多とうけ給はれ、

清水(下)　そうしてくわれいをするものに欲ふかき者多し。しまりの有物に欲のすくなき者多し。物を多くつかひてもむさほる心有を。欲のふかきと云。わがつかふ事に。しまりの有者は。しわきにたれ共欲はあさくむさほる心すくなし。過てしわきはいやしくあはれとにくむべきにはあらす。すきてつかひすごす人は。いさきよくはあれと十方なし。大名は。しはきより国をうしなひ。名をよごし人にそしられ。わざわひをまねく。大名のすりきりて身上のはてたるは。古今きかす。欲ふかくしはすぎてはてたるは多し。小身なる者のしはくてはてたる者はすくなし。つかひすごしてつぶれたるはおほしと云。(P43)

(7)**可**五ノ七十五　むかしさる人の云るは、仁義の勇者血気の勇者とて、侍の心剛なるに大小あるべし、まづ仁義の勇者と云はじひふかく義理つよく分別あって、萬事の道理にあきらかにして活達なれば、身をいたまず、命をすつる事は露塵物の数とせず、たとへば千萬の人々が手打指ざしゝて臆病なりとあざわらふ共何とも思はず、又千萬の人々が、三国無類の大剛の人よとほめあがむるとも何共思はず、我すべき事をばすみやかにおこなひ、我すまじき事をばいさゝか是をおこなわずして、かけ引自在に、一度いかれば天下の人おぢおそれ萬忠功なるなり、かようの人々は国家の仕置をおこなはせ大将をさすべし、又血気の勇者と云は、手前一分の働かひ〳〵敷、無理やりにつよく無分別にしてじゃうこはくひとむきにして、身命すつる事をも、蚊のまつげありのまなこほどもいとはず、大剛強なり、かようの人をば、人数すくなくして勝たるつよみの入所に用、むりに破べき時につかふべし、

清水(上)　順礼曰。大勇小勇仁義の勇血気の勇といふ事の候よし承をよび候。此わかち少きゝ申度候。答曰。血気の勇と申候はむりにつよきを申候。仁義の勇と申候は。道理につよきを申候。小勇とは一人のはたらきかひ〳〵しきを申候。大勇と申は一度いかりて天下もおそるゝ程の事を申候。めをいからし刀をとるは物のかすともせす。諸人かよはきといはんとも帰りみす。かけひき我まゝにして大なる功をなすを大勇といふなり順礼曰。是は分別者にてこそ候はめ。勇者とはいひかたし答曰。勇とは思ひさためてつよきを云。人はともいへかくもいへ。すましき事はすましきなり。すべて事はすへき事と思ひさためたるところが勇にてあり順礼曰。此勇にはいつれか能候や答曰。いつれもよし。仁義の勇の人にはまつりことをさせ。小勇の人には。一人ふたりのつよみ入ことにつかひ。大勇の人には大将をさせ。血気の勇者には。むりにやぶるべき所に用候へは。みな用にたつ事候へし。(1)(P27)

(8)**可**五ノ七十六　むかしさる人の云るは、名大将の陣をとり人数をつかひ、武略、知略、計策などのてだてをしはたらき給ふを物によそへてみるに、上手の碁をうち将棋をさすごとし、いかにとなれば、上手はまづ手前のかこひをかんようとして、しめをつよく、其石其こまの有てよき所におき、扨用つかひよき所に用つかふ、第一歩を足軽となぞらへけるにや、飛車、角行両将のかけ引、桂馬の筋違飛、香車の一向、金銀のかこひ専用におぼゆる、扨責あひ地取碁たち仔細に書付がたし此愚筆によって心得あるべし、何時も上手の碁打将棋さし見落しなくてはまると云事なきものなり、実に油断大敵とあるをや

清水(上)　仁義の勇の人にはまつりことをさせ…将棋の馬をつかふかごとし。上所と下手と有へし。(P27)

(9)**可**五ノ七十八　むかしさる人のいへるは、物を知たる人にも二やうあり邪知ある人は、我利発わがさいかくなるゆへに、仕置法度の足まとひにして、国家のわざはひとなる、又本知ある人は萬事正理にくらからず、仁義にたつし、国家せいひつの棟梁なり、この本知邪知の大概を知たくおもはゞ太平記龍馬進奏の巻をよむべし(2)

清水(上)(イ)　しると云うに二色あり…人の物しるにも。ほんちに物しりたると。いつわりのちと二色ありとしるへし。善悪はたれもしりたるといふ位は。ほんちにはあらす。本知といふ位分別有へし(P18)

(下)(ロ)　是はうちみたる所は分別あるに似て用にたゝぬちゑなり。じやちといふものなり。是非のさかいめをよくしりたるをほんちと云なり。じやちある人は国のわざはひなり。ぐちにしておろかなるよりは。一たんひききことにして。まつり事の足まとひになるなり(P39)

(10)**可**五ノ八十一　むかしさる人の云るは、世に物うきものは牢人となれる侍

成べし、されば聖主賢君と、萬民あふぎたっとみ申其御代にさへ御じひのうるほひは、松葉の露はほそくもおよばず、けっく世間の米穀萬高直になりもて行て、飢かつへにおよぶふびんさよといたはりければ、傍なる人さし出ていひけるは、いや〳〵聖主賢代の御じひはあまねしとこそおぼゆれ、其いはれは、諸牢人雨にかみをあらはず、風にもとゞりをけづらず、一とせ牢人ばらひと云御法度ありて、国々所々町々小路々々村々里々までをもきびしくふれまはりて、一夜の宿をさへかさず、さあれば諸牢人ゆかりをたゞし、知音をたよりに立よらんとすれども、主人よりの法度におそるゝか身を引か、日比のよしみを忘れて、事とふ人もなし、侍が侍を頼むは是常の事、時節相応の諸人の心中行義是非におよばず、さあれば老たるおや、いとけなき子、なやめるつま、みぐるしきにもつをかたにかけ、こなたかなたとうかれまどひて、門にたゝずみ戸にさまよひ、天にあふぎてなげきかなしみ、地にふしてなきさけぶ、あはれなるかないたましきかな、其にせ〳〵相応に、めしおかれぬるさへあるべき事ならぬに、かくまでは牢人をにくみそねまれ給ふぞや、ただし牢人の主君の、いにしへ不忠不功の逆心ある人に、つかはれし牢人にこそいかりもうつるべけれ、何ぞあまねくの牢人うれへかなしみわきまへがたし、古き詞にいかりは水中の蟹にもうつり、愛は屋上の鳥にもおよぶと云る事、是隔別の事なるべし、がんくはいいかりをうつさずとあるをや

清水(上)(**イ**)　順礼曰。諸国にかしこきやうにて大やけならぬ事こそ候へ。らう人の出入法度といへる人あり。是は何心にて候はんや。つみあらばつみにこそおこなはれめ。つみなき人ならはいかゞしたる心ゐにて出入をきらはれ候そ。らう人は人にては候はすや。侍の侍をたのむはあるべき事なりえこそ心得られね。きたなき心ねにてもや候はん。…かやうの事いかん。

(P29)

同(下)(**ロ**)　牢人とおほしき人。わびたるさゝへわりごなともたせて。やさかあたりにやすらふをみて、町の人〳〵さたしけるは。近年は米の高きのみならす。物毎に高くして。すぎうきとみえし中に。あき人はわが売しろかへる物も高く売程に。たがひになりてともかくもわたるとみえたり。いとあはれなるは牢人なるへし。町人にはかねを下され。米をかし下され。にぎはひてうら山しき事のみおほからん。牢人には宿もかさねは。うへかつゆる人もありときく。さりながら牢人はみな敵のうちにありし人か。又はかいゐきにあひたる人の。果かなと仰けれは。かようにに成ゆくも理りにてもや候らんと云。一人答曰。ゆめ〳〵其道理にあらす。つみある人はころされ流されはつるゆへに。つみなき人の牢人多し。つみなき人はすてはつるにあらす…一人曰。うへの御心程にこそなゞとも。半分にても君の御しひの心を。下〳〵にもたせたらは。今迄かくは候はしといへは。けにもとてみなうなつく。

(P45)

(11)**可五**ノ八十七　むかしさる時、親子ともに牢人いたし…かの人曰、いや〳〵我云所の隠居といふは、もろこし賢者の隠居なり、それ賢者のいんきょといふは、萬世をわたるいとなみ、わが身に一つも益なき事とさとり知て、おく山ふかく隠居して、大国大官をあたふれども、二度世に出ぬもあり、又我を善人と見知もちゆる人なきゆへに、ちりあくたの世間にまじはり、けがらはしきをいやがりて、見知きゝおよび用る人有までもと、しばらく海辺などに隠居するもあり、又天下みだれさはがしくて、山陰海辺も山賊海賊の不道発向し、すみうき時には城下の町に出であきなひさいくをして、命をつなぐ隠居もあり、又世間すいびしてあきない職も成がたき時は、門番をいたし、或は茶をも引、或は少の代官などをも仕り、其一役に命ををくる隠居もあり…

清水(上)　順礼曰。隠居とはいかやうなる事を申候や答曰。隠のしなさまある事にて候。まずゐんしやと申は人をいやがり。物にたいくつし。よろづのわざ。身にゐきなしとしり。山ふかくかくれゐて天下をあたふる人ありとも二度世間にてぬを隠しやと申候也。儒ゐんと申候は。我と世とそむきみしる人もなきゆへに。ちりあくたの中にある事をきらひて。しはし山中にかくれて。世もすなをに用る人もいてきぬれは。世にいてゝ天下の民をすくふなり。又乱国にして。山かけ海辺もすみにくき時は。市の中にまきれゐて。あき人のやうにして。其日〳〵をくらすもあり。是を市ゐんといふなり。又世間からくして。市の中にもゐられぬ世もあり。か様の時は。かへつて君のあたりちかくよりて。門はん茶ひき。薪奉行など。一役請取て。其一色に身をかくして月日をくらすゐんきよもあり。又功なり名とけて身しりそき。老を送るゐんきよもあり。時により人によりしな〳〵おほきと知へし。(P20)

＊

右の対比からこの二作品がその文辞を共有していることは明らかであろう。こゝから『可笑記』が『清水物語』にか、あるいはその逆の過程での形で二作品の接触が当然予測さるわけであり、それぞれの奥書によれば、『可笑記』は

「于時寛永十三年孟陽中韓（澣カ）江城之旅泊身筆作之・寛永壬午（十九年…筆者註記）季秋吉旦刊行」の記述をもつことから従来寛永十三年一月の執筆・寛永十九年の刊行とされ、また『清水物語』は「寛永拾五戊寅十月吉旦開之」の記述をもつ。そしてこれらの記述をそのとおり信じるとすれば接触の過程は『可笑記』が『清水物語』にということになりそうである。しかし問題は『可笑記』の奥書に存する。この問題に関してかつて松田修氏が『可笑記』と『可笑記評判』（了意作）との親狎関係に注目して提起した『可笑記』成立に関する示唆的な見解[3]をこゝでもう一度振り返ってみる必要がありそうである。松田氏の提出した見解とは『可笑記』の記述の次の事柄に関する指摘に基づくものであった。

○此比九州しまばら一揆御せいばいにも、よせての大筒何の用にたてりともうけ給りおよはず、城中の中箇にてこそ、よせてみな打ころされぬ（二ノ四十一）

○ちかき比の軍は摂州大坂也、此陣もはや三十年になれり（二ノ四十二）

○すでに陸奥の守正宗公御一代すりきりにて、おはしませしためしあるをや（五ノ五十）

ところが歴史的事実の上で、まず島原の乱は寛永十四年十月二十三日島原領内でのキリシタン農民二人の逮捕と同二十五日の信者による代官殺害に端を発し、同十五年二月二十八日幕府側総攻撃によって壊滅した。またこの乱を引き合いにしての『可笑記』の大筒中筒優劣論に関しては松平輝綱従軍日記である『島原天草日記』寛永十五年二月十日の条に「この頃城中に於いて度々大鼓を鳴らし躍舞するあり。」としてその躍舞のための「トントナルハ寄衆ノ大筒　ナラヌト見シラショコチノ小筒デ」の唄が記録されている。[4]次に『可笑記』で故人とした伊達政宗は寛永十三年五月二十四日没である。そして大阪の陣が慶長十年（冬の陣）・元和元年（夏の陣）であり、執筆の寛永十三年まで約二十三年、刊行時の寛永十九年まで約二十八年の年数で「此陣もはや三十年になれり」と近い数字になる。とすれば、『可笑記』奥書の記述のありかたは、『可笑記』の韜晦性や依拠した説話の同時代性獲得のための仮構化意識[5]を考え合せるならば、松田氏の指摘のように奥書の年月の繰り上げは意図的になされた操作であるとみなければならないであろう。したがって『可笑記』の執筆時期は寛永十五年以降寛永十九年までの間、しかも「此陣もはや三十年になれり」の記述によって刊行年の寛永十九年に近い年にまで下げてこなければならない。

なお深沢秋男氏は現在伝わる『可笑記』諸本の踏査の結果[6]寛永十九年版十一行本を初本とし版本以前に書写本（自筆本・写本など）の存在を推測しておられるが、もし書写本が存在したとすれば、初版本までの期間に奥書を付したまゝでの加筆作業が推測されることになろうが、加筆が続けられていたとしても、加筆終了をもって『可笑記』の成稿の最終的段階と考える限りにおいて、寛永十九年に近い時点の成立に異論のないところではなかろうか。

以上の事柄を要約すれば、『清水物語』の刊行年が寛永十五年十月であること、さらにこの書物が後続の『祇園物語』（その成立が寛永十五年を隔ること遠からず、刊行もまた寛永年間を下るまいと推定されている[7]）で「京やゐなかの人々に。二三千とをりも売申せし也。」とその好評が伝えられていることなどから『清水物語』が『可笑記』にという経路での接触が最っとも妥当な解釈ということになるであろう。すなわち如儡子は『清水物語』から『可笑記』の記述にその幾つかを取り込んだのである。

*

如儡子が『清水物語』から『可笑記』に取り込んだと確認しうる十一か所のうち、その枢要は「すりきり牢人」・「侍のありかた」・「国主のありかた」の三つの条条である。これらは如儡子にこの同時代の書物がいかなる意図をもつ書物として受け取められたのかを物語るものであろうし、如儡子がこの書物にいかなる意味を見いだしたのかということとそのことは表裏をなし、その点に『可笑記』を書くことにむかわせた彼自身の内的衝動を露呈する結果にもなっていることが知られよう。

『清水物語』上・下二巻は清水寺に参詣した作者がそこで傾聴した翁と順礼の問答（上巻）作者下向の道すがら耳に留めた人々―談義僧と聴衆・少年と老人・茶屋の主人と客・若者達などの問答・対話（下巻）を通じて儒仏論・学問論・聖主君子論を儒教の立場から展開し同時代の政道・牢人の問題に触れて終る構成をとり、議論の一般性とその文章の平明さとによって所謂仮名草子の啓蒙・教訓の性格をもつ。二三千部も売れたという『祇園物語』の記述はそうした性格の証左ともいえよう。だからといって作者朝山意休庵の書く意図がそこにあったと単純には断言しえない要素が『清水物語』にはある。序に意休庵は次のように記した。

文章（しょう）のよきをこのむ人は。三史文選（さんしもんぜん）などをみるへし。道をしらんとねかは

ど。四書五経をまなぶへし。和歌の言葉つゞきもてあそばむ人は。源氏物語のたぐひをよむへし。ひきことのおもしろきには。昔よりこのかた記しおきたる。和国草紙に。諸氏百家の事。仏経などひきあはせたるおほし。今此物語は、一つの心ざすところありとみるへし。心ざす所のほかは。いつれもいにしへのさうしにはおとれるなるらし

「今此物語は。一つの心ざすところありとみるへし。」という記述の裏に意休庵の秘めた「一つの心ざすところ」とは一体何に対しての志向であったか。この記述はそれまでの前半の記述の文意が明瞭なのに比して不分明な文意であり、しかも意休庵はこの書物の執筆動因と志向の端的な明瞭化を忌避して、読者にそれを暗々裏に察することを要請している。ところが、この含意的忌避的記述は序のこのか所に限ったものではなく本文中にもそれを察しうるか所があり、この二つのか所は明言することの表白を忌避する点で意休庵の書く意識と無縁ではなかったはずである。本文の忌避的か所とは上巻の左の記述である。

順礼曰。諸国にかしこきやうにて大やけならぬ事こそ候へ。らう人の出入法度といへる人あり。是は何心にて候はんや。つみあらばつみにこそおこなはれめ。つみなき人ならはいかゝしたる心ねにて出入をきらはれ候そ。らう人は人にては候はすや。侍の侍をたのむはあるべき事なりえこそ心得られね。きたなき心ねにてもや候はん。又諸くわんじん法度の高札あり。何事ぞや。やるまじき事ならはやるまじきにてすむ事なるへし。高札はいまめかしき。…又年貢をなさぬうちは。借銭かへすなといふ高札あり高札などは天下の人尤といふ事をこそ書へきに。…あまりにもんもうにしてわたくしびれたる事を。高札にかゝんと思ふ心のうちあさはかなり。かやうの事はいかん翁曰。子細もや候らんいさしらず順礼曰。今の代の御まつり事如何答曰。御しひの御心ふかくありかたきためしとこそ。野のすゑ山のおくまでも承りて候へ。其外の事は我等こときの者には。かたる人もなければきく事もなく候。

順礼が問いかけた牢人法度の厳しさは、元和九年の大規模な牢人の京都からの追放、寛永九年、同十二年の武家諸法度での牢人の仕官禁止、寺院武家屋敷への牢人の寄宿禁止、都市農村では町触五人組帳前書などによる他所からの怪しい者への貸宿禁止などによる牢人弾圧の事実がよく物語っている。順礼の発したこの問いは既に問うことの疑性の限界を越えて批判である。しかしそれは政治の「かしこきやうにて大やけならぬ」「あまりに…わたくしびれたる」現実—公的擬制におおい隠された私的性格という虚偽への批判である。この批判を内にこめた「今の代の御まつり事如何」の問いが発せられていながら、それに対する「御しひの御心ふかくありかたきためしとこそ…承りて候。其外の事は我等こときの者には。かたる人もなければきく事もなく候」「子細もや候らんいさしらす」の答えは回避にしか過ぎない。この回避的答えの背後には政治批判を忌避しようとする意休庵の意識が働いていることは明らかである。しかし回避的言辞は意休庵の表面上のポーズではなかったか。なぜならこの回避的答えの後でふたたび町人の口を借りて都に充満する牢人の日常生活の無惨な現状を同情的に語って、

あしきはあしきにつけてかたづき。能はよきにつけてゑらひ出さればうへにのそむ人はあるまし。かようのいつはりは御しひの心よりおこる事なれは。今の御代にこそかようの事もありぬへけれ。やがて牢人もなくなり候はんとかたれは。一人の曰。うへの御心程にこそなくとも。半分にても君の御しひの心を。下〳〵にもたせたらは。今迄かくは候はしといへは。けにもとてみなうなつく（下巻）

との言及がそれを示唆している。すなわち、慈悲心があまねく行きわたった政治の現在との答えの後にそれに敢えて背反して町人の一人に「半分にても君の御しひの心を。下〳〵にもたせたらは。今迄かくは候はし」の批判的希求の言を発せさせる必要はなかったはずであり、そしてそれは何よりも政治批判忌避の意に反することであったはずである。とすれば意休庵の志向は政治批判忌避の外見を装いながらの同時代の政治とその当路者への批判にあったといえるのではないか。換言すれば、「あしきにつけてかたづき。能はよきにつけてゑらひ出さればうへにのそむ人はあるまし。」という理念の当為とそれによっては解決されることのない牢人の充満する現実との矛盾を「いつはり」として認識していながらも、この矛盾を「御しひの心よりおこることなれば。今の御代にこそかようの事もあるべけれ。やがて牢人もなくなり候はん」という一時的過渡的現象との見解を採らせ、実現性の希薄な未来期待論に現実政治の「いつはり」を解消させる為政者への妥協的な論理の展開のしかたは政治批判の色合いを外面から払拭することでその意図を掩蔽しようとする意識の反映によるものであると見做しうるということである。

では意休庵を政治批判にかりたて、しかもそれを掩蔽させた動因はということになれば、駿河大納言徳川忠長との関係を抜きにしては考えられないようで

ある。朱子学者意休庵が忠長に駿河に仕えたのはわずか一年寛永七年から八年の間であり、また忠長の運命が大きく暗転する時期であった。すなわち、大御所秀忠の三男将軍家光の弟として駿河・遠江・甲斐五十五万石の大名から言行驕暴の咎をもって甲府に蟄居されたのが寛永八年意休庵が致仕帰洛したその年である。翌九年正月二十四日の秀忠の死以後同年十月家光は忠長の領地を没収し高崎に幽閉し、さらに翌十年十二月自害をもって処罰した。意休庵致仕二年の後に訪れた急転直下の悲劇的結末である。この悲劇は将軍の座をめぐる家光忠長の角逐確執を背景に、松平忠輝・忠直のそれと同じく、幕府支配の確立のための大名統制を同族にまで適用し、それに適応しえない同族を敢えて犠牲にすることですべての人間関係を縦の体系の支配体制化に組み込む企図の冷酷な結果であった。大阪城主を望み百万石加増を願い殺生禁断の駿州浅間神社での猿狩家臣の手討などの忠長の狂乱は彼の将軍家との同族意識に由来した縦の体制化への反逆であったと理解される。[8] したがって、意休庵が「大やけ」なるべき政治に「わたくしびなること」を、「御しひの御心」の政治でありながら不周致による「いつわり」を見抜き批判しえたのは忠長狂乱の時期に仕えた体験に負っていることは明らかである。『清水物語』の中で、かせ侍に「今の主君の心はかりがたし…何事ありとても此人のために用にたゝむとはおもはす」（下巻）といはせ国主論を展開しているのは、そうした政治体制に適応しえなかった忠長の言動を諫言し入れられなかった意休庵の心底を吐露するものであったろう。忠長甲州蟄居の年にそのもとを意休庵が去ったのはそうした忠長意休庵の関係を暗示的に語るのである。『清水物語』の政治批判は忠長に対して、さらには忠長を通して政治の当路者に対してのものであったといえる。しかしその政治批判忌避の意識は忠長との関係からの当路者のそれの嫌忌への顧慮によるものと考えられる。とすれば序の「一つの心ざすところ」という含意の裏の志向は当路者に向けられたものであり、その掩蔽の衣装が『清水物語』の大半を占る儒的立場からの啓蒙・教訓のかたちをとった儒仏論・学問論などの抽象的一般論に他ならず、それであればこそ「道をしらんとねがはゞ。四書五経をまなぶべへし。」（序）として本書から儒学的性格を読者が読みとることを拒否しようとしたのではなかったろうか。

*

『可笑記』が『清水物語』から取り込んだ先述の三つのか所は『清水物語』の中で意休庵の政治批判が最っともあからさまなか所であり、またそこに如儡子の『可笑記』を書くことの枢要があった。なぜならば如儡子自身徳川の秩序からあぶれたすりきり牢人に他ならず「親子ともに牢人いたし越路のかたはらに徘徊仕り候時、あまりの事に父にをくれ、老たる母にやしなはれて、雪苦霜辛をしのぎおくりける」（五ノ八十七）という牢人法度の苛酷さとその結果である牢人生活の無惨さとが彼の日常体験そのものであったからである。それゆえに、侍の道にそむき、刀脇差をもさゝずがっそう頭にやつし、町人の庇護に甘んじ隠居然としていると彼に浴びせられた非難嘲笑に、如儡子は「かじをたへたる沖津船のよるべさだめぬうき身」の牢人を庇護する町人の厚志には「主君の礼をせずんばかなふまじ」と反撥する。この反撥の胸裏には侍の道を失った形骸だけの今の侍と報恩をもって奉公せねばならぬ主君に奉公のできぬすりきり牢人弾圧の現実に対する憤怒と形骸化した侍の道の現実においてたとえ町人であれその厚志に主君の礼をつくすすりきり者の侍の道を持することの矜持とそれの自恃が渦巻いている。この情念こそ『可笑記』を書くことの内的衝動に他ならず、如儡子の『清水物語』への共感が生じた由縁であった。『可笑記』はまさに不遇の場にあって『甲陽軍鑑』に説く「侍道」を自恃しその倫理をもってした徳川秩序の矛盾に対する告発（一ノ一）の書である。[9] 意休庵の批判が儒的理論からのものであったとすれば如儡子のそれは徹底したすりきりの体験から割り出されたものであった。この点にこの二作品の批判性の質的相違が存在する。それを共通する文辞として並記対比した(2)のか所から明瞭に読み取ることができる。すなわち、侍のかたぎの善悪を論じて、『清水物語』の文章は

…人の心のよからん事をねかはゝ。つね〳〵さほうのよきものを上てもちゆへし。親にかう〳〵なる人は君にちうあり。人のしたしみと。をんをわすれぬものは主君のをちめをみすてす。…

という儒的理論による明快な判断を示しているのに対して、『可笑記』はこの文章に依拠しながら、

…去ながらも先親に孝行なるをみきいては、其人かならず主君に忠節あらんと思ふべきか、又ゆへある人のおちぶれすりきりたるをあはれみ情ふかく人の恩をかんじわすれぬをみきいては、其人かならず主君のおちめを見すてず、いづくまでも付したがひて、いかなるかんなん辛苦をもみとゞくべきと思ふべきか…もしかようの人あらばいそぎ知行金銀をとらせ、情をもかけてめしつかはるべき歟…能々そこの心をみさがし候はゞ十人の七八人は、みな

けいはくへうりのやつばらなるべし…

という口調は『清水物語』の論定を徹底して反語的懐疑的に切り返すことに向けられている。そしてこの切り返しの絶え間ない繰り返しは徳川秩序の現実に対する抜きがたい不信の表明に他ならない。しかも「能々そこの心をみさがし候はゞ」という現実認識のにがさの言辞は『清水物語』の儒的理論を根底から否定し去るものでもある。『清水物語』が二三千部も売れたという事実は当時の読者が権力側をも含めて意休庵の啓蒙・教訓という掩蔽のからくりにひっかかったことを意味していよう。しかし『可笑記』での反語的表現による徹底した切り返しはそのからくりを見破り掩蔽とそのための妥協的表現とに苛立ち技癢した如儡子の『清水物語』批判を物語る。だが、その如儡子の署名が韜晦であり、その著述『可笑記』もまた奥書の年月を偽記しての韜晦の書であった。[10] しかしながら、その韜晦の枠を自から破って自己を表白せねばならぬ衝動の書でもあった。『清水物語』への共感と批判はそうした如儡子の自己表白の露呈である。この意味で『可笑記』は『清水物語』の批判的継承の書物であるといえるであろう。

註

1　『太平記』巻第二十九〈師直以下被レ誅事付仁義血気勇者事〉に仁義の勇血気の勇が論じられているが、『可笑記』のこの論は、『太平記』の文辞に依拠するよりも『清水物語』に依拠したとみる方が、その文辞の比較の上から妥当と思われる。『清水物語』の方が『太平記』に依拠したものであろう。

2　「太平記龍馬進奏の巻をよむべし」の記述は『清水物語』の「じゃちある人は国のわさはひなり…まつり事の足まとひになるなり」に示唆され『太平記』巻十三〈龍馬進奏〉の藤房の諫言を暗示しようとしたものであろう。

3　松田修氏「仮名草子における作家の成立―武士出身者を中心に―」（文学・昭和三十八年五月号）

4　『続々群書類従』史伝四

5　拙稿「可笑記出典考――沙石集・十訓抄との関連―」（秋田語文・昭和四十六年一号）

6　深沢秋男氏「『可笑記』の諸本について」（文学研究・昭和四十三年二十八号）、「『可笑記』の諸本について―補訂―」（文学研究・昭和四十四年三十号）

7　『近世文学未刊本叢書仮名草子篇一』解題（養徳社刊）

8　『日本の歴史』13「江戸開府」参照（辻達也著中央公論社刊）

9　前掲拙稿参照。

10　松田修氏前掲論文参照。

なお『可笑記』本文は『徳川文芸類聚』二に、『清水物語』の本文は『近世文学未刊本叢書仮名草子篇一』によった。

（一九七一、九・十六）